

まえがき

まるで祖国イギリスから追放された流罪人であるかのように、ジョージ・ギッシングが南フランスのピレネー山麓の村、イスプールで1903年12月28日に46歳の短い生涯を閉じてから、はや100年が経過しようとしている。本書は、その没後100年の記念事業として、過去40年にわたって世界のギッシング研究を先導したフランスのピエール・クステイヤス氏、アメリカのジェイコブ・コールグ氏、そして日本の小池滋氏に特別参加を要請し、10名の日本人研究者と編者が学識と愛情を結集させて制作したものである。

生涯に22の長篇・中篇小説、約115の短篇小説、そして随筆集や旅行記や批評書などを著したギッシングは、生存中に限って言えば、ある程度の成功を収めることしかできなかった。しかし、20世紀の後半になって——特に幾つかの小説が再版されてギッシング研究が急に勢いを増した1960年代以降は——彼自身と彼の作品に対する関心が着実に高まり続けている。その関心の高まりを実質的に支えているのは、1965年に『ギッシング・ニューズレター』として創刊され、1991年に『ギッシング・ジャーナル』と改称されて現在に至っている季刊誌である。この雑誌は学術論文、詳しい書評、出版物の紹介に加え、私たちの研究に資する最新の情報を常に提供している。その意味において、創刊時からの編集委員であるクステイヤス氏、コールグ氏、そして小池氏のギッシング研究への貢献には、計り知れないものがある。

小池氏は1970年にクステイヤス氏と一緒に『東洋と西洋のギッシング』を出版したが、そこに掲載された「日本におけるギッシング」によれば、この作家が日本で最初に紹介されたのは1908(明治41)年のことであった。オックスフォード大学留学から1906年の夏に帰国した英文学者、平田禿木が文学雑誌『趣味』の新年号(第3巻)で、「愛読せる外国の小説戯曲」に関する調査に対し、「ジヨオジ・ギツシングの作にて『ヘンレエ・ライクロフトの手記』といふもの、幾度くり返しても新しき趣味を覚え候、愛讀書とも申すべきか」と回答した時のことである。そして翌1909年には、のちに慶應義塾大学教授となる戸川秋骨が、『ライクロフト』の「春」から8章を訳して『趣味』の7月号に出している。

それ以後、日本において最も人気があったギッシングの作品は小説ではなく、この随筆集『ライクロフト』であった。市河三喜の注釈つきテキストが学校などで使われ始めた1921年以降、特に1920～30年代に多くの先達の手によって『ライクロフト』が翻訳されたことは、本書第15章第5節「日本におけるギッシング」の「翻訳書」を見れば即座に分かる。また、戦時中は平和主義ゆえに不遇な時代を送ったギッシングの『ライクロフト』——夏目漱石の『点頭録』(1916)にギッシングと反軍国主義を論じた一節がある——が、戦後の1950～60年代に第二の翻訳黄金時代を迎えたことも分かるはずである。

学生時代に『ライクロフト』のテキストを英語の授業や翻訳で読んだ経験のある年輩の作家や文学者で、この本を愛読書として挙げる人は非常に多い。例えば、辻邦生(1925-99)は水村美苗と交わした往復書簡『手紙、葉を添えて』(朝日新聞社、1998年)でギッシングを取り上げている。それは、東京生まれの彼が信州の自然美に魅せられて松本の旧制高校を選び、同世代の人たちと同じように『ライクロフト』を読んだ結果として、「季節の移りゆきを、愛着のまなざしで眺めるライクロフトという人物に、どこか日本の隠者風の面影を感じ、(中略)イングランドの片田舎に静かな家を持ち、本に囲まれて暮らすギッシングに大いに憧れた」からであった。そして、辻邦生と同じ東大仏文科卒で、『司令の休暇』など骨肉を扱った作品が多い阿部昭(1934-89)は、「ヴィジュアルディの『四季』みたいなもので、(中略)鳥の声がしたり疾風が来たり、自然そのもののような呼吸の変化が面白い」という理由で、『読みなおす一冊』(朝日選書、1994年)に『ライクロフト』を推している。また、辻邦生より一世代若い1947年生まれのも、『水滸伝』で有名なハードボイルド作家、北方謙三も花鳥風月を友とする晴耕雨読の生活に憧れていたので学生時代から、そして作家になってからも『ライクロフト』を繰り返して読んでいると、ある記事で述べていた。

このような有名作家のみならず、老いを養う知識人の多くにとっても、ギッシングの作品と言えはさておき『ライクロフト』であった。それは、『ライクロフト』が多種多様なトピックを選んで鋭い人生批評や独特の美学を平明達意に綴った随筆であったからというよりは、全編が無常観に統一された鴨長明の『方丈記』(1212)や吉田兼好の『徒然草』(c. 1331)のように、名利の巷を離れて草木虫魚の世界に心を遊ばせることを最も高尚な生き方としている点において、もののあわれ、幽玄、わび・さびの伝統を持つ日本人の心の琴線に触れる随筆であったからだと思われる。しかし、『ライクロフト』はギッシングが理想の女性(ガブリエル・フルリ)との結婚を果たし、過酷な

ロンドンの貧困生活から解放され、精神的にも金銭的にも余裕ができてから書かれた半自叙伝的な随筆であることを忘れてはならない。編者もまたヘンリー・ライクロフトの生活に憧れ、彼の意見に心の底から共鳴する者の一人であるが、その反面いつも不満な気持ちが心の片隅にわだかまっていた。『ライクロフト』はギッシングが死ぬ直前に出版された辞世の書ではないか、小説が大部分を占める彼の作品群の中にあって特異な存在として位置づけるべきではないか、という釈然としない気持ちがあったのである。

ありふれた日常的な感覚を退けるために俗世間から逃避した孤高の人間の作品だけを文学と呼ぶのであれば、それは道徳性や実用性を無視して他の文化領域の介入を許さない審美主義の作品のように、文学が本来的に持つ多様性と重層性を極度に制限し、結局は文学自体を弱体化させてしまう。『ライクロフト』の名声がギッシングを自然の豊かな田園生活と結び付け、『イオニア海のほとり』での古代文明に対する彼の追慕の念が異郷生活を連想させるのは事実だが、そうした田舎や外国は彼がロンドンの屋根裏部屋の窓から陰鬱な深い霧を通して見ようとしたものにすぎないのである。このようなギッシングのたくましくも、やるせない想像力による憧憬の念の視覚化は、彼の大都市に対する憧れ——本書第14章の小池氏の言葉を借りれば「地方都市に住む少年のロンドンに対する憧れ」——が幻滅の悲哀と化したあと、空想と言語的表出のレベルで起きた新たな代償行動として見なすことができる。確かにギッシングが小説の中でロンドン以外の場面（例えば、『サーザ』のイーストボーン、『因襲にとらわれない人々』のイタリア、『埋火』のギリシャ、『命の冠』のヨークシャー溪谷、『下宿人』のロンドン郊外、『渦』の北ウェールズなど）を描くことはある。しかし、彼の傑作とされる小説の舞台の多くは、みじめな生活を余儀なくされた彼が精通していたロンドンである。大都会ロンドンは彼を引き付けて離さない創作活動の磁場だったのである。

秀才の誉れが高かったギッシングは、故郷のウェイクフィールドから産業革命後の近代都市マンチェスターへ移って間もなく、窃盗事件によって退学処分を受けたが、そのトラウマのために死ぬまで疎外感に苦しめられた。更に、ギッシングはアメリカから帰国して大都市ロンドンに出たのち、悲惨な貧困生活と不幸な結婚生活の中で異常と思えるほど頻繁に引越を繰り返したが、それもまた彼の疎外感を雄弁に語っている。社会集団における生活上の桎梏から解放された近代人は、資本主義の発展に伴って人口が急増した都市——例えば、1801年に110万だった人口が100年後の1901年には651万になったロンドン——で前近代的社会の帰属意識を喪失し、都市空間における孤

独と不安によってアイデンティティの危機に陥った。そのことを実証する事例史としてギッシングの生涯ほど興味深いものはないだろう。ギッシングの最晩年にロンドンへ留学し、彼の本を幾つか買い求めた漱石は、孤立した人間の集合体にすぎない近代社会について、『それから』(1909)の代助に「文明は我等をして孤立せしむるものだ」と解釈させた。日本の近代をテーマにした漱石の作品のように、ギッシングの生涯の物語と彼の分身的人物が数多く登場する作品は、近代の文明社会によって人間が強いられた孤立を示す第一級の歴史資料として読むことができるのである。

近代の知識人であったギッシングは、自らの貧困ゆえに有産階級から疎外されたように感じていた。同時に、無産階級については貧困と悪徳を結び付けて考え、自分の方から労働者たちを疎外する傾向があった。その結果、彼は有産階級にも無産階級にも属さない、いわば物理的疎外と心理的疎外を象徴する無階級の人間となってしまったのである。しかしながら、ギッシングが労働者たちに対して哀れみの心を抱いていたこともまた見逃すべきではない。この嫌悪と同情の共存に典型的に現われているように、ギッシングは多くの問題(社会、階級、文明、都市、大衆、教育、改革、女性、結婚、家庭、商業、金銭、芸術、科学、人生、自己など)に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していた。私たちが彼の作品に感じる力強さは、まさにこの葛藤の激しさに他ならない。ギッシングの小説の主人公たちはアンビヴァレンスによって精神が揺らぐことが多いが、そうした人物描写は彼が最も得意とする分野である。このように様々な問題に対して社会的に抑圧せざるを得ない矛盾した感情を小説の中で表現し得たからこそ、ギッシングは肺の持病に抗して46歳まで生き延びることができたのかも知れない。

英米のギッシング研究は彼の没後ほぼ半世紀にわたって不毛の時代が続いた。ロンドンの貧民の生活を描写するギッシングの力量は、メレディスやハーディのような一流の作家には即座に評価されたが、彼の執筆の意図や趣向は誤解されることが多かった。批評家たちは『ライクロフト』を傑作と言って持てはやす一方で、ギッシングの悲観主義を強調して彼の小説に厳しい評価を与えたのである。しかし、ギッシングは世をはかなむ隠遁者の側面だけでなく、保守主義、古典主義、理想主義、実証主義、自然主義、平和主義、環境保護主義、現世謳歌主義、芸術至上主義、運命論、不可知論、懐疑論、

リベラリズム、ヒューマニズム、フェミニズム、アンチヒロイズムなど幾つもの側面を持ち、それらの問題を実際に多くの小説で扱っている。1960年代に海外でギッシング研究の一大ブームが起こったことは先に触れたが、その本当の理由は批評家たちがギッシングの世界に見られる、このような多様性と重層性に気づいたからではあるまいか。その後もギッシング研究の発展は着実に続いており、ギッシング関連の書籍の出版量はディケンズ、プロンテ、ハーディなどに比べるとまだ少ないが、サッカレー、ギヤスケル、メレディスといった主要作家とほぼ同数である。

日本でもギッシングの小説はずっと評価されなかった。労働者階級を独創的に描いた1880年代の長篇小説は特に不評であった。1933年に日本で初めてギッシングの研究書を出した織田正信ですら、注釈本としては貧民街を描いた『民衆』や『ネザー・ワールド』などではなく、世を捨てて静かにギリシャの古都で暮らしている男——ヘンリー・ライクロフトを思わせる男——を主人公とした『埋火』を選んでいる。しかし、1970年代になると、英米で高い評価を受け始めた『三文文士』やフェミニズムとの関係で注目され出した『余計者の女たち』をはじめ、幾つかの長篇小説に目が向けられるようになった。そして、1990年代からギッシング関係の論文が急激に増えたのは、言うまでもなく1988年に小池氏の責任編集による『ギッシング選集』（全5巻）が出版されたためである。恵まれたことに、現在ではギッシングの主要作品のほとんどが翻訳されている。日本で10冊以上の長篇・中篇の作品が翻訳されているヴィクトリア朝作家は、ディケンズ、ウィルキー・コリンズ、ハーディ、そしてギッシングだけである。

本書は、翻訳された作品のすべてを章立てしただけでなく、その他の中篇・長篇小説と短篇小説も取り上げたので、実質的にギッシングのほぼ全作品を網羅した研究書となっている。第3章から第11章までの作品論には、それぞれの分析を吟味してもらうために、作品の詳しい梗概を付した。また、その他の中篇・長篇小説と短篇小説を扱った第12章と第13章にも、論考に作品の梗概が組み込まれている。今回の編集方針は、重箱の隅をつつくような局所的な読みではなく、ギッシングの文学全体に関わる大きな問題について、新たな視点で読者を大いに啓発するような読みを提供することであった。そうした読みに興味や疑問を覚えた読者には、それぞれの考察を踏み台とし、実際に原典にあたって更に深く問題を究明してもらいたい。

本書を出版する目的は、ギッシングの世界に内在する様々な問題点を照射し、その全体像を解明することにある。彼の場合は、作品以外に作家の内面

を示すような書簡や日記などの資料が、クスティヤス氏をはじめとする研究者たちの努力によって完備しているので、シェイクスピアのような作家の場合と違って、全体像の解明は十分に可能である。そうした点を踏まえ、本書はできるだけ多くの作品や資料を、そして小説以上に面白いと言われるギッシング自身の生涯を積極的に批評の射程に入れながら、広く深く研究する方向を目指した。それぞれの章だけでギッシングの全体像を解明することは無理かも知れないが、本書全体でそれに成功していると読者諸賢が判断されるならば、それだけで編者の目的は達せられたと言ってよい。

ともあれ、特定の随筆集によってギッシング・ブームを起こした素地のある日本で、今度は長篇、中篇、短篇小説を含めたギッシング文学全体への関心を高めたい—それが私たち執筆者共通の願いである。そのためには、ギッシング没後 100 年と生誕 150 年の間、すなわち 2003 年と 2007 年の間が絶好の時期である。この 5 年間にギッシング関連の翻訳や研究書が立て続けに出ることを願ってやまないが、たとえ本書がそのような契機にならなくても、ギッシングの世界を鑑賞する力の涵養に役立ち、その全体像を把握するための手引きとなれば、編者としては本望である。

2003 年 6 月 9 日

編 者